

授業の改善に向けて

——グループ・ワークによるリーディング指導——

Application of Group Work for Improving English Teaching in a Reading Class

高 橋 寿 夫
TAKAHASHI Toshio

With a striking decrease in recent years in the number of high school graduates applying for admission to colleges, various types of educational reforms have been designed and implemented in each college to ensure its survival despite keen competition.

It may go without saying that one of the most important reforms is improving the methods of teaching. College teachers are expected to develop ways of teaching that gain the assent of their students, but it is no easy task to satisfy all students, as they will have a wide range of academic levels, and consequently varied expectations of English teaching.

The purpose of this paper is to introduce a student-centered group work activity in a reading class and indicate how effective it can be in enhancing learning motivation and to verify that it produces improvement in the comprehension of English. In addition, this paper touches upon the social advantage for group work. It can be noticed that group work creates a relaxed atmosphere and lets learners feel freer to make mistakes. Therefore, learners cooperate positively with their peers and find solutions for their problems. It is a desirable byproduct for learners to realize that they are situated in the center of classroom activities and find that learning can be highly enjoyable.

キーワード

グループ・ワーク (group work)、学習者中心の指導法 (learner-centered teaching)、授業の活性化 (dynamic way of teaching)

1. はじめに

「大学冬の時代」が叫ばれて久しい。各大学は少子化に伴う大学全入時代を近い将来に控え、存亡の危機感を募らせ、生き残りをかけてさまざまな改革に着手してきた。入試改革、カリキュラム再編、学生による授業評価、シラバスの作成、オフィスアワーの設定、単位制度の実質化など、枚挙すれば切りがないが、特に重視されるのが、その必要性から実現に格段の努力がなされてきたFDの導入・強化である。これには、平成10年に大学審議会より答申された「21世

紀の大学像と今後の改革方策について」をきっかけとして、学生の質の多様化・大学の大衆化に伴い、これまでの「研究」第一主義から「教育」を「研究」と同等、あるいはそれ以上の位置に引き上げようとする動向を受けて、大学教員に「授業の改善」を強く求めたいというねらいがある。

各大学は、教育改革の柱の一つに「授業の改善」を掲げ、教員はその矢面に立たされているが、多様化した経路により入学してくる学生の学力や学習意欲には差異が大きく、どの学生にも一定の学力向上を保障し、学習意欲も高める指導は決して容易ではない。そのような困難な教育環境の中で、どうすれば「学生を惹きつけ、かつ、学生に学力のつく授業」ができるのか、教員の日夜苦慮しているところである。

本稿では、2002年4月より1年間にわたって、授業改善の一工夫として、リーディングの授業（英語Ⅱ）にグループワークを導入したが、この指導法が学生の積極的な授業参加を促し、授業を活性化させ、また、学生の英語力（英文読解力）をも高めたことを論述する。

2. 教師主導型の授業からの脱皮

これまでの学校教育では、概して、教師主導型の一斉授業が行われてきたが、英語教育も例外ではなく、特に、大学の英語教育では中学・高校以上に教師中心の講義形式が好まれた。つまり、授業は教師側からの一方的な働きかけに終始し、指導が画一的となり、学習者の授業への参加意識は薄く、学習者の授業に対する受身的・消極的な姿勢は否めず、教育効果においても問題があったが、現状の40～50人規模のクラス・サイズでは、定量の学習内容を消化するには一応効率的で、教師の負担も少ないことから、教師主導型の一斉授業形態が当然のように採用されてきた。しかし、昨今の少子化時代にあって、学力や学習意欲の大きく違う学生を前にしてその英語指導を求められるとき、授業形態に一工夫あっても然るべきであるし、授業改善に向けて、あれこれ試行し、活路を見い出すのも大切なことであろう。

3. 学習者中心の授業へ

授業改善にはさまざまなアプローチが可能であろうが、学習意欲を高めて授業を活性化するには「学習者中心」を唱える Learner-centered Teaching が適していると考えられる。この指導法は、すべてを学習者に委ねてしまうということではなく、学ぶ主体である学習者が効果的に学習を促進できるよう、支援する体制を教師が整え、教師が一方的に知識を与えたり、強制的に練習をさせたりするのではなく、適切な指導のもとに学習者の内部に学習を自然に生じさせて学習事項を強く定着させることを意図する。学習が学習者自らの活動として主体化され、学習者相互のやりとりによって、学習活動は一層活発化するという考えに立っている。

4. グループ・ワーク（グループ学習）の特徴

Learner-centered Teaching の一形態に、グループ・ワーク（Group Work）がある。この指導法は「学習は、学習者自らが発し、自らが活動して行うものである」との観点に立ち、学習者の自立を促し、授業場面での人間関係に着目した指導形態である。教育的意義は、学習の効率化とグループ・メンバーにおける社会性の向上である。つまり、学習者個人の発言や活動の機会が多くなり、自発的に学習を行うことで学習意欲が高まり、学習が効率化される。また、共同作業を通じて他のメンバーとの一体感が生まれ、相互に助け合って学習する経験を通じて社会性を養成するのである。学習者の反応は、一般に「気軽にきける」「授業が楽しい」「助け合いができる」「積極的に発表ができる」などと、好意的に受け入れられる場合が多い。

5. 授業におけるグループ・ワークの導入

グループ・ワークの特徴を考察するとき、この手法が大学の英語教育にも十分通用し、授業の改善にも寄与するものと推測される。英語は既習外国語で、学生は入学時すでに6年間の学習を終えている。たとえ苦手であっても、自主学習の素地はできているので、学生相互に協力しあって共同的な学習活動に参加できるし、また、英語の得意な学生は「教える」ことによって充足感が得られ、知識の定着強化をも図れると判断し、授業の一部にグループ・ワークを採り入れ、一年間試行した。

6. 指導目標と授業展開

学習者が共同作業を通じて自主的・積極的に問題解決を図り、学習意欲を高めて、英語力を向上させることを指導目標とした。

授業展開は、クラスを数組のグループに分割し、リーダーを中心にグループ・ディスカッションをさせ、前もって提起された問題点（語句の意味、構文理解、論点の指摘など）の解決を図りながら、内容把握に努めさせた。他方、その成果を点数化し、グループ間で競わせて授業の活性化にも役立てた。

7. 対象クラスと教室

グループ・ワーク試行の対象としたクラスは、1年次生の「リーディング」クラス（英語Ⅱ）で、各組47名からなる2クラスである。教室は、各グループに分かれる必要性から机が固定式

の普通教室は不向きで、机の移動が可能な「多目的教室」を使用した。なお、机はイスとの合体型のもので、移動させるのには便利であったが、机面が小さいため、ノートを取るなどの作業をするには不便で、学習者から不満の声も聞こえた。

8. グループ分け

グループ分けには最も気を遣ったところである。1グループを何人にするのか、グループは男女別にするのか、何を基準にして分けるのか、リーダーをどうするか、などがグループ・ワーク成否のポイントとなる。

(1)グループの構成員数

グループ・ワークを効果的に進めるのに何人がよいのか、定説はないが、外国語学習では4～9人が適切としている実験報告が多い。活発にディスカッションを行い、さまざまな意見を交換するのに4人では少なすぎるし、メンバー全員の声聞き取れ、意見を効率的にまとめ、周知させるには8～9人では多すぎるとの判断から、1グループを6人構成とし、各組を8グループに分けた(クラス人数の関係から1グループは5人構成)。なお、メンバー間の話しやすさを考慮して前期は男女別にグループを構成したが、後期はクラスの雰囲気慣れたこともあって男女混合グループとした。アンケートによって学生にたずねてみたところ、圧倒的多数で男女混合グループが支持された。

(2)Proficiency Test の実施

グループ分けは年間2回とし、前期は、最初の授業時間に Proficiency Test (総合的に英語基礎力を問うもの。所要時間35分)を実施し、成績順に公平に8グループに振り分けた。後期は、前期試験結果により、前期同様、成績順に振り分けた。

(3)グループ・リーダーの指名

各グループ・リーダーには、前、後期とも、成績上位者8人を指名した。成績の優れた者が必ずしも良いリーダーになるとは限らないが、お互いを知らない新入生同士ということもあって互選もむずかしく、やむを得ない措置であった。メンバー間に、できる限り、優劣意識を持たせないために、サブ・リーダーは置かなかった。

9. 使用テキストと進度

教材としては、まず、学生の興味・関心を示すものを心掛けた。次に、1回完結型のもの、

即ち、週に1回の授業なので、毎回、新しい話題でディスカッションができるようにした。そして難易であるが、やや難しく、内容に深みがあって、ディスカッションに熱が入るものに留意した。

以上のことを考慮して、使用するテキストには Dennis Smith・Junji Nakagawa 著 “TRY AMERICA Cultural Keys to Communication” (SANSHUSHA) を採択した。内容は、日本と比較しながら現代アメリカの抱えている諸問題を論説調に述べたもので、セクハラ、離婚、イジメ、飲酒・喫煙など、日本でも関心の高いトピックスが取り上げられている。各課400語前後で、語彙、構文ともに適切な難易度で、グループ・ワークの教材としては格好のテキストである。本文に加えて語彙、内容把握問題などが Exercises として付随している。(資料1、2参照)

10. グループ・ワークの課題

学習者が中心となるグループ・ワークだからといって、「今日はセクハラ問題を扱った一文を読みます。グループ内で自由にディスカッションをして内容把握に努めなさい。問題点が生じれば質問しなさい」では、学習者は戸惑うばかりである。グループ内でどのようなことを行えばよいのかを具体的に示す必要がある。いわゆる「方向づけ」で、これが明確であるとグループ・ワークも活発化する。

「GROUP WORK REPORT」と称した予習プリントを授業の1週間前に配布して、予習をして自分なりの答えを記入してくるよう指示をした。内容は、Passage の内容理解について、語句の意味、構文、論点などについて質問したもので、質問（約8問）の配点も併記し、100点満点とした。(資料3参照)

11. 授業の展開

90分の授業展開は、おおよそ、次のとおりである。

- (1) Passage に書かれた Topic について概略や背景的知識の説明を行う。(10分)
- (2) 各グループにてリーダーを中心にディスカッションを行い、GROUP WORK REPORT に提起された質問 (EXERCISES の問題も含む) を答えさせ、リーダーにグループで合意した答えをプリントに記入させる。その間、授業者は机間巡視して、各グループの質問 (解答のしかたについてのものが多い) に答える。全体に知らせる必要事項が生じたときはグループ活動を中断させて伝える。(40分)
- (3) 各グループリーダーから GROUP WORK REPORT (プリント) を提出させ、他のグループ・リーダーに一枚づつ手渡し、その採点を依頼する。(5分)
- (4) 授業者が質問箇所を押さえながら語句の意味から論点まで、広範囲に説明を行い、内容理

解の定着を図る。この際、学習者に発問したり、質問を受けたりして、授業参加を促す。(30分) この間に、各リーダーは授業者の説明を聞きながら、手渡された REPORT の採点を行う。

- (5)採点された GROUP WORK REPORT を回収し、講評を加えながら結果(成績の最も良かったグループ)を公表する。次週の GROUP WORK REPORT 用紙を配布して終わる。(5分)

12. 学習者のグループ・ワークに対する反応

前期の授業が終了した段階で、学習者にグループ・ワークについての反応を、5項目について、アンケート形式でたずねたところ、下記のような結果を得た。回答者総数は94名(男:57名 女:37名)で、項目(2)と(3)は複数回答である。データを理解しやすくするために、各項目を切り離して、解説を加える。

表1 グループ・ワークの可否

(1) リーディングの授業にグループ・ワークは	男	女	計	%
a) よい	49	34	83	88.3
b) よくない	1	0	1	1.1
c) どちらとも言えない	7	3	10	10.6

リーディングの授業にグループ・ワークの導入を「よい」と答えた学生が全体の9割に迫り、「どちらとも言えない」を合わせるとほぼ100%となり、この指導法が圧倒的多数の学習者によって受け入れられたことを示している。

表2 グループ・ワークを「よい」とする理由

(2) a) と答えた人、その理由は	男	女	計	%
イ) 従来と違う方法で面白いから	19	11	30	31.9
ロ) リラックスした雰囲気ですぐ楽しく学習できるから	36	29	65	69.1
ハ) 話し合ううちに英語(内容)に関する興味を深めるから	8	4	12	12.8
ニ) 友達と協調してやれるから	22	17	39	41.5
ホ) 友達同士お互いに分からぬ点など聞きやすいから	17	15	32	34.0
ヘ) 突っ込んで調べ、深く話し合えるから	6	8	14	14.9
ト) 刺激を受けて、よく予習するようになるから	12	10	22	23.4
チ) その他(責任感から予習に力が入るから)	1	0	1	1.1

グループ・ワークを「よい」とする第1の理由として、「リラックスした雰囲気ですぐ学

習できるから」を挙げている。「リラックスした雰囲気楽しく学習させる」ことはいくつかの外国語指導法（The Silent Way、Suggestopedia など）の指針でもあり、Krashen のいう「情意フィルター」（affective filter）を低くするのにも役立つのである。この考え方の大切なことを、授業者はいつも心に留めておく必要がある。

次に高い比率を示した理由は、「友達と協調してやれるから」である。グループ・ワークの特徴の一つである「社会性の育成」である。対人行動が磨かれ、人格形成にもよい影響を与え、学習意欲を高める一因にもなる。

そして、「友達同士お互いに分からぬ点など聞きやすいから」と続く。一斉授業では分からぬ点や疑問点を教師に聞くのは難しく、学習者の不満となっている。小グループの友達同士なら何の遠慮もいらず、聞き合うことによって学習効果を高めることができる。

表3 グループ・ワークを「よくない」とする理由

(3) b)と答えた人、その理由は	男	女	計	%
イ) 訳読による一斉授業の方が慣れているから		回 答 な し		
ロ) 友達間の勉強では不安だから				
ハ) グループで学習すること自体好きでなく、なじめないから				
ニ) 時間をかける割には能率が上がらないから				
ホ) 先生に当てられる心配もなく、予習をさぼるようになるから				
ヘ) グループに協調性がなく、覇気に欠けるから				
ト) その他（採点の公平性に欠けるから）	1	0	1	1.1

この項目は、(1)の問いに (b) の「よくない」と答える学習者がある程度の人数はいるだろうとの想定のもとに作成されたのであるが、実際は1名しかなく、アンケートの意味合いがなくなってしまった。(1)の問いで (c) の「とちらとも言えない」とした回答者にもこの項目を答えさせるべきだった。反省すべき点である。

「採点の公平性に欠けるから」との回答があったが、これは各リーダーが行う GROUP WORK REPORT の採点に甘い、辛いがあって、その結果による成績優秀グループの決定は納得できかねるというものである。採点時には、注意して採点基準などを明示しているが、全く公平な採点を求めるのは難しい。

今回のアンケート結果には表れなかったが、グループ・ワークの短所として一般に指摘されるのは「友達間の勉強では不安だから」と「先生に当てられる心配もなく、予習をさぼるようになるから」である。今回の授業では、前者の対策としては、グループ・ワークの後、30分の時間を費やして授業者が細かく説明・解説を行い、理解の定着を図った。後者については、一方で授業のたびに予習の必要性を説き、他方、予習を忘れると5点減点のペナルティを科して提出の GROUP WORK REPORT に記入させ、成績に影響して他のメンバーに迷惑をかける

ことを自覚させた。(資料3参照)

表4 予習の頻度について

(4) 授業の予習は	男	女	計	%
ア) よくする	41	33	74	78.7
イ) あまりしない	15	4	19	20.2
ウ) まったくしない	1	0	1	1.1

前もっての十分な下調べがなければ、活発なディスカッションは望めない。グループ・ワークの成否は予習にあると言っても差し支えないので、予習はぜひ確かめておきたい項目である。予習を「よくする」がほぼ80%ということによって悪い数値ではないが、油断をすればこの数値が下がることに気をつけたい。実際、入学当初(4月)と較べると、月を経るごとに予習をしていない学習者に注意する回数が多くなる。一斉授業の場合も同じ傾向をたどるだろうが、グループ・ワークの場合とどう違うのか、今後、調べてみたいところである。

表5 グループ間の競い合いについて

(5) グループ間の競い合いは	男	女	計	%
ア) よい	42	26	68	72.3
イ) よくない	5	1	6	6.4
ウ) どちらとも言えない	10	10	20	21.3

学習にあたって適度に競い合わせるのは、学習意欲を高めるのに効果的である。個人と違ってグループ間の競い合いということで、学習者もゲーム感覚で楽しんでいる。成績トップグループが発表された瞬間、ワッと歓声上がる。呼名されたグループ・メンバーの顔に一仕事をやり遂げたという充実感が読み取れる。一斉授業では味わえないこのようなプロセス体験が7割を越す学習者に「グループ間の競い合いはよい」との判断をさせたと推測される。競い合いを否定する主な理由の一つに、表3の(ト)に見られる「採点の公平性に欠けるから」が考えられる。授業後、採点結果に不満の声もときどき聞こえた。採点の公平性をもっと高めることができれば、競い合いを肯定する学習者がさらに増えるであろう。

13. グループ・ワークと英語力向上について

学習者にとって、グループ・ワークが学習者中心の好ましい授業形態であっても、英語力(主として英文読解力)の向上が見られなければ、さほど意味のない指導法になってしまう。そこ

授業の改善に向けて（高橋）

で、後期より2クラスの内、1クラスを従来の一斉授業形態に変えて授業を行い、学期末に同じ試験問題（前期、後期とも同じ形式の主に読解力を試す問題）を課し、両クラスの成績（平均点）を調べてみた。結果は次のとおりである。

表6 クラスの成績（試験の平均点）比較

クラス	授 業 形 態	前 期	後 期
CLASS A	前期、後期ともグループ・ワークを採り入れた授業	51.9	65.7
CLASS B	前期はグループ・ワークを採り入れた授業、後期は一斉授業	49.1	53.7

両クラスとも、前期より後期の試験成績がよくなっているが、前期と後期の試験問題は違うので、一概に成績が向上したとはいえない。しかし、後期と前期の点差は CLASS A で13.8、CLASS B で4.6 となり、明らかに CLASS A の成績の伸びがはるかによいことが分かる。CLASS A の好成绩の原因は、これも一概にグループ・ワークを授業に採り入れたからだとは言えないだろうが、少なくともこの事例に基づくかぎり、グループ・ワークは大学の英語教育にも立派に通用する手法であり、授業でうまく運用されると、英語力のさらなる向上が十分に望める指導法になりうると結論づけても差し支えないであろう。

14. まとめ（今後の課題）

学習者からはグループ・ワークによる授業には極めて好意的な評価を得たが、「従来と違う方法で面白いから」の回答のように単に目新しさに惹かれているだけでは手放しで喜べない。まだまだ改善の余地は残されている。グループ・ワークは、その準備から進行まで授業者の負担も大きく、決して能率的な指導法とは言えないが、学習者一人ひとりが目を輝かしてディスカッションに溶け込んでいる姿を見るのは楽しいものである。

今後の課題として、グループ・ワークと学力の向上との相関関係をさらに詳しく調べ、授業改善への頼もしい指導法に成り得るかとうか、研究を深めたい。

参考文献

- Genesee, Fred (1996). *Classroom-based Evaluation in Second Language Education* Cambridge University Press
- Tudor, Ian (1996). *Learner-centredness as Language Education* Cambridge University Press
- 青木昭六他 (1983). 『英語指導法ハンドブック3』大修館書店
- 浅野 誠 (1994). 『大学の授業を変える 16 章』大月書店

天野郁夫 (1997). 『大学に教育革命を』 有信堂

JACET 教育問題研究会 (1998). 『英語科教育法全国調査報告書』 大学英語教育学会

白畑知彦 他 (1999). 『英語教育用語辞典』 大修館書店

鈴木祐治 (2003). 『英語教育のグランド・デザイン』 慶応義塾大学出版会

谷口賢一郎 (1998). 『英語教育改善へのフィロソフィ』 大修館書店

土屋澄男・広野威志 (2000). 『新英語科教育法入門』 研究社出版

長野 正 (2001). 『授業の方法と技術』 玉川大学出版部

畑中孝實 他 (2001). 『実践的英語科教育法』 成美堂

Unit 9

PASSAGE



America is known as the land of the free. When it comes to the right to smoke and drink, however, Americans are no longer completely free to do either one.

The right to smoke is a good place to begin. Merely ten or twenty years ago, smokers enjoyed the same freedom as those in Japan: they could smoke almost
5 anywhere. Then nonsmokers made their voices heard. They pointed out the health risks of breathing second-hand smoke from burning cigarettes. These protests resulted in the creation of smoking and nonsmoking areas in public buildings. Now the restrictions on smoking have gotten much more severe. Smoking is prohibited in all public buildings. In company buildings, smoking is only permitted in rooms that have
10 special fans to move the smoky air outside. Plus, the new health-aware United States is starting to frown on anyone who smokes. The trend now is to quit.

As in Japan, there are large numbers of deaths and accidents due to motorists who drive after they have been drinking. There have always been fines for those caught drunk behind the wheel, but that wasn't enough for the victims. The real push against
15 drunk drivers began with the formation of MADD (Mothers Against Drunk Driving). The organization was formed by one woman whose son was killed in an accident involving an intoxicated driver. MADD quickly grew into a major political lobbying group. The group has successfully made drunk driving a serious legal offense. Drunk drivers are now not only fined, they face mandatory jail terms and they lose their
20 driver's licenses automatically. Another outcome of the MADD campaign is the so-called "dramshop law". This states that any person or establishment that allows a drunk person to drive away is responsible for all financial penalties if the driver kills or hurts someone on the way home.

The rights to smoke and drink are now serious issues. If a citizen decides to do
25 either one, they must do so with care.

NOTES:

when it comes to the right to smoke and drink 「喫煙と飲酒の権利となると」 **made their voices heard** 「彼らの声をあげた」 **breathing second-hand smoke** 「間接的に煙を吸うこと」 **The trend is to quit.** 「今日の傾向はたばこを吸わないことにある」 **those caught drunk behind the wheel** 「飲酒運転で捕まった人たち」 **MADD** (Mothers Against Drunk Driving) 「酒酔い運転に反対する母親の会」 1980年、自分の3人の子供が自転車道路で酔っぱらい運転の車に殺された、彼らの母親 Candy Lightner が結成した全国的組織。飲酒運転に反対する団体は他に SADD (Students Against Driving Drink), RID (Remove Intoxicated Drivers) などがある。 **an accident involving an intoxicated driver** 「酔っぱらいのドライバーを巻き込んだ事故」 **a major political lobbying group** 「主要な市民活動グループ」 **a serious legal offense** 「重い法律違反」 **face mandatory jail terms** 「強制的にある期間刑務所に入れられる」

EXERCISES

① 次の語の意味に最も近いものを一つ選び、その記号を () の中に記入しなさい。

- | | |
|---------------------|--------------------------------------|
| 1. second-hand () | a. drunk |
| 2. restriction () | b. result; consequence |
| 3. prohibit () | c. limitation |
| 4. frown () | d. power; force |
| 5. push () | e. compulsory |
| 6. intoxicated () | f. forbid |
| 7. offense () | g. chargeable |
| 8. mandatory () | h. breaking the law |
| 9. outcome () | i. not direct |
| 10. responsible () | j. to show of dislike or displeasure |

② テープを聞いて、それぞれの質問に対する正しい答えを一つ選びなさい。



1. *Why did nonsmokers raise an objection to smoking?*
 - a. Because they realized the risks of second-hand smoke.
 - b. Because they didn't enjoy smoking.
 - c. Because they wanted to create smoking areas in buildings.
 - d. Because they got severe restrictions on nonsmoking.
2. *What is the trend for smoking now in the U.S.?*
 - a. To smoke only in smoking areas.
 - b. To permit smoking in special rooms.
 - c. To stop smoking.
 - d. To establish a smoking room in a building.
3. *Which statement is not correct concerning MADD?*
 - a. It became a major political lobbying group.
 - b. It succeeded in making drunk driving a serious legal offense.
 - c. It was organized by one woman.
 - d. It was formed after the dramshop law passed.
4. *Which action does the dramshop law prohibit?*
 - a. To hurt someone on the way home from a bar.
 - b. To allow a drunk driver to drive away.
 - c. To drive without a driver's license.
 - d. To act against traffic rules.

注：②の質問はテープにより2回繰り返して聞かせた。

GROUP WORK REPORT (UNIT 9)

June 13, 2002

GROUP ()

Group Leader ()

Group Members ()

予習チェック

減点 (- 点)

質問

(1) 1行目 the free を 1 語で言い換えなさい。(5点)

(2) 4行目 those を 2 語で言い換えなさい。(5点)

(3) 6行目 These protests とはどのような抗議かを言いなさい。(15点)

(4) 14行目 wheel の意味を言いなさい。(5点)

(5) 14行目 that の指す内容を言いなさい。(10点)

(6) 19行目 they の前に 1 語補うとすれば、どんな語かを言いなさい。(5点)

(7) 21行目 “dramshop law” とはどのような法律かを言いなさい。(15点)

(8) 25行目 do so とはどうすることかを言いなさい。(10点)

EXERCISES 1 (各問 1 点)

1() 2() 3() 4() 5() 6() 7() 8() 9() 10()

EXERCISES 2 (各問 5 点)

1() 2() 3() 4()